

クビアカツヤカミキリ発生園での防除対策(秋～翌春)

○伐採・伐根 (できる限り実施することが望ましい)

幼虫の駆除(9月～翌年4月)

成虫脱出時期以外の時期に行う
発生初期に徹底して健全樹への被害拡散を防止

注意:

幼虫が根に入っている可能性があるため、伐採だけでなく伐根も行う

伐採樹は放置せず、破碎(10mm以下)、焼却処分のいずれかで処理する

本種は**特定外来生物**に指定されているため、飼養や園外への運搬は規制されている

焼却等のため樹を園外へ持ち出す場合は、虫の飛散防止措置を講じる

難しいときは

○ネット巻き

成虫の分散防止(6月までに)

成虫の飛び出し防止のため、**被害樹**にネットを巻く
目合い4mm程度の丈夫なものを使用



股の部分からネットを巻く



ネットのつなぎ目はしっかりと縫い付ける



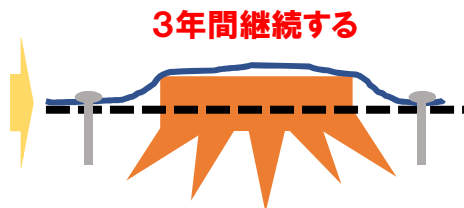
樹幹にネットを余裕をもたせ2重に巻く



根本は杭で地面に固定する

やむを得ず、伐採の後、伐根まで実施できない場合の対応

根の中の幼虫が成虫になって出てこないように切り株を目合い4mm程度のネットで覆い、さらに二重のブルーシートで覆う



注意:

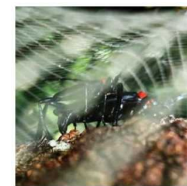
「ネットを巻いたら終了」ではない!!
定期的に見回りネット内部の成虫を捕殺

放置すると...

- ① ネットをかみ切り脱出
- ② ネット内での交尾・産卵



ネットをかみ切ろうとする成虫



ネット内で交尾する成虫



写真提供：
大阪府、(地独) 大阪府立環境農林水産総合研究所

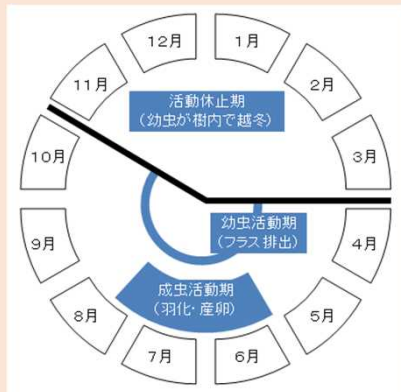
クビアカツヤカミキリの特徴と既発生地での被害状況



- ・体長は**2.5~4.0cm**
- ・オスはメスより触角が長い
- ・特有のニオイを放つ



食害により枯死したモモ



- ・成虫は6~8月に羽化・産卵する
- ・幼虫は5~7月に最も活動が盛んになる
- ・11月以降は活動を休止し、樹体内で越冬する

参考：大阪府「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策」



加害されたモモ樹の内部

写真提供：栃木県

クビアカツヤカミキリの防除対策(春～秋)

成虫の防除(6～8月)

- 成虫活動期に、主に幹や枝に薬剤を散布する(残効は短い)
- 成虫は見つけ次第、捕殺する

幼虫の防除(4下旬～10月)

- 薬剤の樹幹注入(ただし、被害の激しい樹は薬剤による全滅が困難→9月以降に伐採・伐根)
 - ・千枚通し等で、排糞孔に詰まったフラスを取り除く
 - ・排糞孔にノズルを差し込み、薬液を**あふれるまで**注入する
- 捕殺
 - ・千枚通しで樹皮をめくり、掘り取って殺虫する

【樹幹注入の方法】



フラスを硬いブラシや千枚通し等で取り除く



排糞孔を探す



排糞孔にノズルをさし、薬液を注入する



薬液があふれるまで注入する

使用可能な農薬
は裏面参照

クビアカツヤカミキリに使用可能な農薬一覧(令和元年11月21日現在)

【幼虫を対象としたもの】

農薬の種類	農薬の名称	主な適用作物名
メタフルミゾン水和剤	アクセルフロアブル	さくら
フェンプロパトリンエアゾル	ロビンフッド、 ベニカカミキリムシエアゾール	うめ、もも、おうとう、果樹類*1、樹木類
ペルメトリンエアゾル	園芸用キンチョールE	さくら
アセタミプリド液剤	マツグリーン液剤2	さくら
スタイナーネマ カーポカブサエ剤	バイオセーフ	もも、うめ、食用さくら(葉)、さくら
ジノテフラン液剤	ウッドスター	さくら
チアメトキサム液剤	アトラック液剤	さくら

*1かんきつ、りんご、なし、びわ、もも、うめ、おうとう、ぶどう、かき、マンゴー、いちよう(種子)、くり、ペカン、アーモンド、くるみ、食用つばき(種子)を除く

【成虫を対象としたもの】

農薬の種類	農薬の名称	適用作物名
ボーベリア ブロンニアティ剤	バイオリサ・カミキリ	果樹類、さくら、食用さくら(葉)
MEP乳剤	スミパイン乳剤	樹木類
メタフルミゾン水和剤	アクセルフロアブル	うめ、さくら
チアメトキサム水溶剤	アクタラ顆粒水溶剤	もも、ネクタリン、おうとう、小粒核果類*2、うめ
アセタミプリド水溶剤	モスピラン顆粒水溶剤	小粒核果類*3、もも、うめ、すもも、さくら
アセタミプリド液剤	マツグリーン液剤2	さくら
DMTP乳剤	スプラサイドM	もも
DMTP水和剤	スプラサイド水和剤	もも、うめ、すもも
シクラニリプロール液剤	テッパン液剤	もも、すもも

*2うめを除く、*3うめ、すももを除く